The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グローバリゼーションは1571年に始まった
Author(s)	フリン, O. デニス; ヒラルデス, アルトゥーロ
Citation	パブリック・ヒストリー. 2006, 3, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public, Vol. 3, 2006, pp. 19-33
Globalization Began in 1571
Dennis O. FLYNN and Arturo GIRALDEZ

グローバリゼーションは 1571 年に始まった *

デニス・O・フリン、アルトゥーロ・ヒラルデス

平山篤子 (訳)

1．イントロダクション：「グローバリゼーション」定義を巡って

「グローバリゼーション」なる言葉は研究、一般を問わず世界中あらゆる処で現在最もよく使われている言葉だといわれる。しかしながら、「グローバリゼーション」という言葉をいかなる意味合いで用いるかの定義を提示している使い手は僅かでしかなく、世界史全体を見渡してグローバリゼーションの起源にまで敢えて遡る者となると更に少ないことに、我々はいささか失望せざるを得ない。拙論の目的は 2 点、即ち第 1 は、世界史に用いられる場合、何時をもってグローバリゼーション誕生の時とするかの考察、第 2 は、グローバリゼーション誕生の正確な年を提示できるような明確な事象を示すことで第 1 点を明確にすることである。「グローバリゼーションは 1571 年に始まった」という我々の命題は拙論の主題をなすものであり、我々の論点全体を示すアウトラインは当イントロダクションの最後の部分に示す通りである。

「グローバリゼーション」という言葉がどのように使われているか広く文献に当たってみたが、満足できるような定義をみつけることは出来なかった。New Palgrave Dictionary of Economics(1)は全く定義づけをしていないし、The New Encyclopaedia Britannica は文化面での定義を試みている。即ち、

> 日々の生活状況が、道具や知識が広まることで世界中同じような形になっていくプロセスを言う。このプロセスを極端に推し進めれば、しばしばグローバリズムとして言及されるように高度な資本主義、インターネットによる通信やオンラインシステムによって促進される姿になり、地域の伝統や特色を破壊し、その代わりに世界レベルで単一化した文化を

---

* この論文の縮小版はすでに "Ciclyes of Silver. Globalization as historical process" (World Economics, Vol.3, No.2, April-June 2002, pp. 1-16) に掲載されている。

(1) J. Eatwell, M. Milgate, and P. Newman (eds.), *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, London: Macmillan, 1998.

創り出す様をいう。[2]

以下の文はフランス大学出版局が発行した『経済学用語辞典』の「グローバリゼーション」の項目にある核心部分を抜き出したものだ。即ち、

> グローバリゼーションはモノの生産が極めて国際化され、国境をこえて流通することを含む。先進諸国で生活水準が同一化し、消費行動が均質化することから、企業はますますグローバルに考え、規模の経済性を活用しようとグローバルな戦略を立てる。[3]

社会学者、ジャーナリスト、政治家等々はよくこの言葉を使うが、この言葉に何らかの明確な意味づけをした上での使用ではない。各人が、自分の使途に合わせてどうにでも使ってよいようにみえる。「グローバリゼーション」なる言葉がこのように勝手に様々な使われ方をして、様々な場面で用いられるので、現代の世界中の人々に強い感情的反応をかき立てるのは当然のことだ。ビジネスチャンスを求める人には世界的に市場解放が進むことは望ましい。それが利益を生み出すからだ。その一方で他の職種はグローバリゼーションに反対する。海外からの製品が既存の国内マーケットを脅かすからだ。雇用保護派は、利益があるといわれても懸念を表する。業種によっては国際競争が国内雇用を脅かすからだ。自由貿易は豊かな国であろうが、貧しい国であろうがそれに参画すれば遍く生活水準を上げ得る、とはデヴィッド・リカードが呈した比較優位の法則 (1819 年に初めて提唱された) であり、経済学者は一様にこの説を持ち出す。しかし、これに参画して結果的に被害を被る産業分野が当然あることも彼らは認める。ただ、全体として得る利益が十分大きいので、勝者が敗者の損失を補うことが出来るほどであり、それでもまだ余剰が出るので、全ての人々の生活レベルを向上させることが可能だと主張する。環境保護派は、こうした自由貿易主義の主張には納得しない。少なくとも消費主義は脆い地球環境への脅威であるとみなす傾向があるからだ。宗教指導者らは市場主義が道徳的な価値を破壊するのではないかと危惧する。結局は、グローバリゼーションを巡る議論は相対立する立場が醸し出す不協和音に満ちているということだ。ただし、次の一点には誰もが同意するだろう。即ち「グローバリゼーションは、海図もない未知の海域へ人間を世界規模で放り込んでいく最近の現象らしい」ということだ。

読者は近年の政治がらみの論争から定見もヒントも何ら得ることはないだろう。よって、ここで敢えて我々自身の見解を示すことにしよう。そして、一連の歴史的過程を指してグローバリゼーションという言葉を使うことにしたい。いまさら万有引力の法則があるか否かの議論が無意味なように、我々はグローバリゼーション誕生に到る進化論的なプロセスは自明のものと考える。ヨーゼフ・シュムペーターの勧めに従うなら、経済プロセスの起源を理解することがまず基本である。

---

(2) "Globalization and Culture", in *The New Encyclopaedia Britannica*, Vol. 20: *Macropaedia, Knowledge in Depth*, Chicago: Encyclopaedia Britannica, Inc., 2002, p.133.

(3) Frédéric Teulon, *Vocabulaire Économique*, 3rd edition, Paris: Presses Universitaires de France, 1996, p. 61.

第一に経済学の主題は基本的には歴史的時間における一回限りのプロセスである。現在も含めて、いかなる時代の経済現象も、その歴史的事実に関する適切な展望と、歴史的体験の背景の理解なしには解明することは出来ない。[(4)]

歴史的な観点からもみようという人は、グローバリゼーションを通常 20 世紀、それも殆どが第二次世界大戦後に生起した現象として思い描く。即ち、

世界がグローバルに繋っているのは、現代に極めて特徴的な姿であり、人類が初めて経験する新しい事実、変化だと思っている人がいる。だが、歴史を地球規模でみなおせば、これはグローバリゼーションの一つの発現形態に過ぎない。最近の 50 年から 100 年間を含めてグローバリゼーションとその起源はそれ故世界史の主要テーマというべきである。[(5)]

最近の技術革新や、航空機、コンピュータ革命の結果、世界は小さくなったという認識は広く認められる。それによって最近のグローバリゼーションにこの概念は強く感じられる。例えば、19 世紀、アメリカ西部は人口希薄な地域と考えられていた。約 140 年前、アメリカでの大陸横断鉄道完成が、ロッキー山脈 (北米大陸分水界) とシエラ・ネバダ山脈に代表される強大な壁を実際に縮小したのである。要するに、世界の諸地域が時間と共に徐々に一元化されていき、20 世紀後半に顕在化してきたこの現象の最終段階をグローバリゼーションと呼んでいるということなのだ。

全体として各地域が時間と共に漸進的に他地域と繋がるようになったということには何ら異存はない。だが、それでも問題の核心が残されている。世界の地域が繋がっていくとき、どの時点からグローバリゼーションといえるのか、という問題である。歴史を顧みない分析はグローバリゼーション開始の日付やその基準・原因を説明できない。グローバリゼーションの流れは発展段階として理解するべきである。つまり現在は過去から継承されており、グローバリゼーションの説明はその起源から説き起こされなければならない。100 年前にライト兄弟が初めて空を飛んだということを踏まえて今日「航空機の時代」を語る。また「原子力の時代」といえば、第二次世界大戦末期の最初の原子爆弾をもって始まったものだ。つまり、あらゆる時代は何らかの出来事をもって始まりとするということだ。「グローバリゼーションの時代」というからにはその始まりの時を明確に出来るはずである。

「世界史」は最近アメリカ中の関心を集めている (2002 年春からアメリカ全土の高校最終学年では能力検定試験に世界史が課されることとなった) 。世界史学会が先頭に立って、この動きを全世界に広めている。[(6)]「世界史研究者」は従来の国別での考察を拒否し、その代わりに気候、地理、経済、また疫学、生物環境、人口、そして文化的局面に関心を寄せ、国を超えた拡大地域を視野に入れている。これらの研究者が何千年にも亘って陸海双方のルートでアフリカ

(4) Joseph Schumpeter, *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press, 1954, pp. 12-13.

(5) Raymond Grew, "Food and Global History", in Raymond Grew (ed.), *Food in Global History*, Boulder, CO: Westview Press, 1999, p. 5.

(6) 更に情報を得たい場合は *www.thewha.org* 参照。

を含むユーラシア大陸全体に及ぶ深い繋がりがあることを指摘するのは至極正しい。だがしかし、世界史研究者が非常に離れた地域間の繋がりをもグローバリゼーションとして描き出す場合はこの限りではない。彼らが強調する旧世界内の長距離交流は、グローバリゼーション誕生に関する我々の理解にも実際重要な役割を果たしている。しかし本当の意味でのグローバリゼーションは、旧世界が 1571 年にアメリカ大陸と直接繋がるまでは展開されなかった。太平洋はこの海だけで地球表面積の三分の一を占める。アメリカ大陸と大西洋で地球表面積の概ね三分の一だとすると、アフロ・ユーラシア部分は残りの約三分の一ということになる。こうなると旧世界内の歴史上の繋がりを「グローバル」と呼ぶのは不適切ではないかと我々は考える。地球の三分の二、即ち大西洋、アメリカ大陸、太平洋の大部分を排除して、これを「グローバリゼーション」と定義するのは便宜的に過ぎる。

人が居住する全ての大陸が地球規模での交易を通して深く繋がり合い、継続的な交流が始まった時にグローバリゼーションは始まったとする説を我々は主張する。

> アメリカの発見、喜望峰回りによる東インド地域への往来は人類の歴史に記録される最大にして最も重要な出来事である。その成果はそれ自体で既に非常に大きなものであった。しかし、この結果がどこまで影響を及ぼし得たかは、これらの発見成就以降流れた 2-3 世紀という短期間だけの検証に全て収まり切らない。これらの接触が人類にいかなる利益があり、あるいは不幸を惹起するのか、その結果にはまだこれから出現するものもあろうし、人知で予見することは出来ない[(7)]。

世界規模での交易は以下の状況下で芽生えたのである。即ち 1) 人口稠密な全ての大陸が産物を継続的に交換しはじめる。2) 取引量が何れの取引相手にも何らかの継続的な影響を与えるに十分な量に達する。16 世紀以前、無視できない量の大陸間交易が存在したのは事実である。しかし、1571 年にスペインがその物資集散地としてマニラを建設する以前にはアメリカ・アジア間に直接の交易のルートはなかった。1571 年以前には世界市場はまだ系統だって、あるいは完全には繋がってはおらず、この年以降繋がったのである。

一万年以上の没交渉を経て、旧世界と新世界の間に生じた接触は人類が進む道を非常に (時に危害を与える形で) 変化させた。たとえば、旧世界の疫病はアメリカ大陸の住民を十分の一に減らした。新世界の人々がアフロ・ユーラシア大陸の疫病に対する免疫を持っていなかったからだ。このことは、新世界の莫大な資源開発にアフリカ奴隷の輸入がなぜ不可欠となったかを部分的にであれ説明するものだ。ヨーロッパ人は新世界に大量の家畜 (牛馬など) や栽培植物 (小麦、砂糖、オレンジなど) を導入し、徐々に、しかし不可逆的に新大陸の風景を変えていった。その結果、牛馬のいないアルゼンチン、メキシコ、あるいはアメリカ合衆国のような地域を想像するのは今や難しい。また、たとえば小麦などは今ではこれらの地域の主要産品である

(7) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, New York: Random House, 1965 [1776], p. 590. スミスに同感だが、アメリカ大陸と東インドの間を太平洋経由で繋いだ点が極めて重要であるといい添えたい。

が、ヨーロッパ人との接触以前には全く存在しなかったものである。アメリカ南北大陸に広がる環境は、旧大陸と新たな繋がりが出来たことからそれ以前とは完全に異なった方向へと引き込まれることになったのである。グローバリゼーションのかくも強力にして多様な力はアメリカ大陸にヨーロッパ人が到達するや間もなく始まったのであり、その動きは 21 世紀にも目に見える形でまだ残っている。しかしながら、新大陸を一方的に変化の受け手として考えるのは誤りであろう。それどころか、アメリカ大陸にしかなかった植物や種が旧大陸に持ち込まれ、旧世界の風景をも根本的かつ不可逆的に変えてしまったのである。今日人々が口にする食物の半分は特にアメリカ大陸から入ってきたものだ。玉蜀黍、馬鈴薯、甘藷、落花生、豆類、タバコなどを含む多くの植物がそれにあたる。

研究者はこれらの地球規模の繋がりの歴史を史料で見事に裏づけてきたが、一旦アメリカ大陸が地球規模での動きに組み込まれたことで生態学的かつ人口学的な影響が互いに反響しあってきたことを解き明かしてきた[(8)]。我々の研究は世界的な銀市場が果たした役割を経済的な動力源として説明しようというもので、この動力源は世界構造変化に端緒をつけ、変化を促し続けた[(9)]。銀市場が如何にして、またなぜ地球規模での交易を誕生させ、当時の世界に支配力をもった経済体、即ち中国が中心的役割を果たすようにし向けたのかを我々は説明する。加えて、大洋を越える通商ルートを通じて経済、生態、人口面でこの運動が地球規模に広がった点を我々は強調する。今日の近代グローバルシステムは 16 世紀に始まり、中国市場がその展開を生み出した。

物事を地球規模で捉え始めた人間は 18 世紀に初めて現れたと考える啓蒙主義時代の学者は数多くいた。我々がこの主張を問題視するのは以下の事実があるからだ。大量の商人、政府の役人、宗教指導者、学者などは 16・17 世紀にすでに世界が地球規模で現実に繋がっていることを知っていた。さらに、グローバルな意識の有無が決定要因であるなら、グローバリゼーションを始めるにはそのような意識のある人間が正に何人必要かということだ。18 世紀におけるグローバリゼーションの概念化は、(a) それ以前に前例がすでにあり、(b)16 世紀に始まったグローバリゼーションの事実から生じたものであるということを我々は主張する。

著名な経済史家ケビン・オルークとジェフリー・ウィリアムソンはグローバリゼーションは 1820 年代に始まったと主張、商品価格が 1820 年代に国際的に平準化し始めたことを示して、経済統計に基づくものだと言う。両者がグローバリゼーションなる言葉の定義を明確にし、その議論を実証研究に基づいて提示している点で評価されるべきだろうが、彼らの結論に我々は同意できない。すでにグローバリゼーションを上で定義付けたように、グローバリゼーション

(8) A.W. Crosby, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*, Westport, CT : Greenwood, 1972 ; id., *Ecological Imperialism. The Biological Expansion of Europe, 900-1900*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.

(9) 以下を参照されよ。D.O. Flynn and A. Giráldez, "Born with a ‘Silver Spoon’: The Origins of World Trade in 1571", *Journal of World History* 6, 2 (Fall 1995), pp. 201-221.

の誕生は価格の国際的平準化を必要としない[10]。価格平準化の歴史は重要だが、オルークとウイリアムソンが指摘する 19 世紀の現象は産業革命中に起きたものであり、グローバリゼーションが 16 世紀に誕生してから大分後のことだ。

２．西欧のダイナミズム？

ヨーロッパ人はアフリカ西岸をかなり早い時期に探検してから、アメリカ大陸に向かって大西洋を横断し (1492 年) 、他方で喜望峰を回る航海 (1497 年) 、太平洋横断 (1521 年) を成し遂げた。この全てを 30 年の間に行った。西欧の大航海時代は、西欧の中にあるダイナミズムの成果であると多くの歴史家が認めているといわれる。ヨーロッパ人のダイナミズムはいくつもの独自の影響から生まれた。ヨーロッパの科学、冒険心を喚起する地理的な環境、多様な国民国家間の競争、ダイナミズムを促進する制度、それに資本主義を是認する宗教教義 (他の文化的な要因との相乗効果) などがある。換言すれば、ヨーロッパのダイナミズムが存在する理由に関して研究者の間でさまざまな意見ということだが、一般論として西欧が世界を揺り動かす力を持っている点を疑問視する向きはない[11]。

ヨーロッパ人が優越するという思考は貴金属の歴史の筋書きも決めている。特に、16・17 世紀のヨーロッパとアジアの貨幣を巡る関係に関しては、ヨーロッパにはダイナミズム、非ヨーロッパには疲弊をもたらしたといういい方がされてきた。従来の理解は次のようにまとめうる。ヨーロッパにはある種のアジア産品に非常に大きな需要があった。それには香料、陶磁器、絹が含まれ、ヨーロッパが生産できないモノである。その結果ヨーロッパはアジアのこうした産品を大量に輸入した。だがアジアのヨーロッパ製品輸入は、これに比べて僅かに過ぎず、アジアの消費者は内需的で、相手方のヨーロッパ人とは異なり外国産品へあまり関心を払わないことがその一因だというのだ。ヨーロッパから見ると、アジアからの自分たちの輸入は巨大であるのに比して、アジア向け輸出は僅少ということになる。アジアからのヨーロッパの大量買付に対して――ヨーロッパ側の収支は赤字なので――貨幣をアジアに送ることで対処し、これは何世紀も続いた。ヨーロッパからアジア向け貴金属の流出は、最終的には (アジアの消費者に比べて) ヨーロッパ人の活発な購買意欲に帰すべき事柄である。貴金属はアジアからの買付に

---

(10)　以下を参照されよ。Kevin O'Rourke and Jeffrey G. Williamson, "When did globalization begin?", *European Review of Economic History*, Vol. 6, 2002, pp. 23-50,　および Kevin O'Rourke and Jeffrey G. Williamson, "After Columbus: Explaining Europe's Overseas Trade Boom, 1550-1800", *The Journal of Economic History*, Vol.62, no. 2, 2002, pp. 417-455.　O'Rourke と Williamson についての我々の更に突っ込んだ批判は以下を参照されたい。Dennis O. Flynn and Arturo Giráldez, "Path Dependence, Time Lags and the Birth of Globalisation: A Critique of O' Rourke and Williamson", *European Review of Economic History*, vol.8, 2004.

(11)　西欧中心史観に反論する近年の著には以下を挙げたい。 J.M. Blaut, *The Colonizer's Model of the World: Geographic Diffusionism and Eurocentric History*, New York: Guilford Press, 1993; M. Lewis and K. Wigen, *The Myth of Continents: A Critique of Meta-geography*, Berkeley: University of California Press, 1997; Andre Gunder Frank, *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley: University of California Press, 1998; および Robert B. Marks, *The Origins of the Modern World: A Global and Ecological Narrative*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2002. 伝統的な中心史観の最近の論述としては以下を参考されたい。 David Landes, *The Wealth and Poverty of Nations: Why Some Are So Rich and Some So Poor*, New York: Norton, 1998.

対する支払いとして東に向かって流れざるをえなかった。つまり、貴金属の地球規模での流通に対する従来のこの説明は、「ダイナミズムを持ったヨーロッパ」説と常に表裏する。アジアの消費者がヨーロッパ産品に対して抱くよりはるかに多くの関心をヨーロッパ人はアジアの産品に対して持っており、貨幣がヨーロッパからアジアへ向かうのは、貨幣ではないアジア産品にヨーロッパ人が需要を強く感じた結果でしかない、と。

我々の研究は世界全体で起きた貨幣をめぐる現象とその要因に従前とは劇的に異なった光を投じるもので、それによってこの時期におけるグローバリゼーション誕生にもっとバランスがとれ、ヨーロッパ中心主義に傾かない理解が可能になるだろう。我々は上記の伝統的な考え方を今まさしくも否定した。換言すれば、貨幣貴金属は、貨幣以外の産品の輸入と輸出の間の不均衡に単に対応するために、単純に均衡をとる見返り品としてヨーロッパからアジアへ向かったに過ぎないと主張したわけだ。というのは、従来の貿易赤字説が本当だとすれば、様々なタイプの貨幣がヨーロッパからアジアへ流れたはずである。実際、幾種類かの物資が国際的に貨幣として認識されており (たとえば、銀、金、銅、それに子安貝)、アジアでのその受け取り手は、ヨーロッパ人買い手が代金として送った物体にこうしたものが混っていても気に懸けなかったに違いない。たとえば、標準的な金貨は標準的な銀貨同様に歓迎されただろう。種々の貨幣が西から東へ向かうものと考えられていた。しかし、実際にはそういうことは一切起きなかった。現実に起きたのは、アメリカの銀がヨーロッパを通って (「ヨーロッパから」ではない) 一方的に中国 (「アジア」の抽象表現ではない) そのものに向かって流れたのである。物体のもう一つの代表、つまり金はかなりの分量で―― 1540 年代から 1640 年の間に――中国からヨーロッパへ流れた。この銀対金の交換はヨーロッパ対中国に特有の現象でもない。日本はおそらく、16・17 世紀の間にスペイン領アメリカ全域が生産した半分に相当する銀を産出した。実際、日本の産出銀全量が中国市場に輸出され、同時に日本は (ヨーロッパと同じく) 中国から金を輸入していた。さらに、アカプルコ = マニラガレオン船は太平洋を往来して 1600 年代を通して毎年 50 トンのアメリカ銀を中国に運んだのである。他方で同じ時期、金が中国から運び出され、アメリカに送られた。今日の歴史書には「貿易赤字」という仮説が膾炙するが、それとこの歴史的事実は矛盾する。なぜ、特定の貨幣物体――銀――だけが、ユーラシア大陸内と海路を通って西から東へ継続的に流れ、その一方でもう一つの貨幣物体――金――が同じ交易ルートに沿って東から西へ流れたのかを説明するのに、この定説は無力である。ヨーロッパ対アジアという提示の仕方でこれらの貨幣物体の動きを描き出そうというのはどう力んでも明らかに誤りである。「16・17 世紀に日本は西洋であった」との主張は何を意味しうるだろう。それに、ヨーロッパを通って積み出された銀の内、この時期ヨーロッパ内で生産されたものは僅かでしかない。それはアメリカで産出されたものであり、その大部分が中国に向けられた。ヨーロッパ人は日本銀を中国へ運び込む中間業者としても行動している。なぜ貨幣が、物体現実に起きたように地球規模で動いたのかを明らかにするのに貿易不均衡論は役に立たないばか

りでなく、この概念の道具立てはこのトピックを考える上で明解な思考を妨げる。[12]

同じ時期の他の二つの主たる貨幣形態である銅と子安貝に目をやる時、またもや歴史的事実は貿易不均衡説と矛盾する。スウェーデンはヨーロッパの中で最大の銅供給者であった。しかしおそらく日本の銅生産量は 17 世紀後半にスウェーデンの二倍だった。中国はここでも日本銅の最終にして最大のユーザーである。日本銅の相当量がヨーロッパ向けに輸出されているが、アメリカ銀が流出し続けていたと同時期、日本の鉱山からヨーロッパを通って中国市場に流れていたのである。これらの貨幣物体は二つが関連して組織的に流れた訳ではない。子安貝の世界的生産者はインド洋にあるモルジブ諸島である。モルジブの子安貝はアジア中の市場に輸出された。しかし、ヨーロッパ人商人は膨大な量の子安貝を船のバラストとして輸入し、西アフリカに再輸出して莫大な利益を上げるのが目的であった。世界的に認められた四種の代表的貨幣物体に関する我々の結論とする中心議論は、換言すればそれらの貨幣物体はこの時代、一方向のみに流れ出ることなど世界中で絶対起きていないという点だ。通例の説明では、一般的に貨幣はヨーロッパからアジアへと支払い手段としてやむを得ず流れるといわれるが、歴史的事実はヨーロッパ貿易赤字説の徹底的な否定を可能にする。

近代経済学の理論は、様々な貨幣は (銀貨、金貨、銅貨、子安貝などを含めて) 総計して考察するように教えているが、この理論が、本稿が扱う時期、世界規模での貨幣物体の動きの理解を意図せずして妨げている。従って、我々はここでは貨幣を概念的に種類分けし、銀も含めて貨幣別に扱うべきである。地球規模でそういう考え方を採ると、東対西の概念で物事を捉えることが誤りであることが直ちに明らかになる。東対西、北対南、ヨーロッパ対アジア、他に何であろうが、貨幣手段が対処せねばならぬ貿易不均衡はなかったのだ。存在したのは正に貿易である。グローバリゼーションの誕生に最も関与している特定の市場は銀取引である。銀に対して最も活力ある最終市場は中国にあった。ヨーロッパ人は　これにおいて重要な仲介者である。尤もヨーロッパ人以外の無数の人々も、銀とその関連製品の世界規模の貿易から生じる利益の追求に相当のエネルギーを傾注しているが。

３．銀ブーム

産業革命以前に二度銀ブームがあった。一度目はポトシ (今日のボリビア) と日本の鉱山が世界的に突出した生産量を誇ったので、ポトシ - 日本銀ブームと名付けうる。このブームは 1540 年代から 1640 年代まで続いた「銀の世紀」である。何千トンもの銀が世界中を経由して中国に向かって流れた。そして、中国における銀価格は 1640 年までに国際価格にまで下落し、それは同時に生産コストにまで落ち込んだ。この時、世界規模の銀貿易が超高収益を生み出す世紀は終焉を迎えた。1700 年から 1750 年に再び銀ブームが起きた。今回はメキシコが前代未聞の爆発的銀生産を記録したが、それらも中国市場へと向かった。

---

(12)　K.N. チャウドゥリは大陸間の銀流通と金流通を分離して考える必要を長く主張してきた。 そして、ディビッド・リカードのような古典派の経済学者の論証へ立ち戻るように求める。例えば以下を参照されよ。K.N. Chaudhuri, *The Trading World of Asia and the East India Company 1660-1760*, Cambridge: Cambridge University Press, 1978, p. 156.

1540 年代以降、商人、政府役人、教会関係者、学者、その他様々な人がアメリカ産や日本産銀の最終市場は中国であると共通の認識を持つに至っている。実際、産業革命の初期は第二のブームの時期にあたることは明らかだが、銀が世界貿易の刺激に重要な役割を果たすことや中国の中心的役割をアダム・スミスは明言している。彼が生きている間、アメリカ銀の中国への流入は止むことなく続いていたのだから、当然である。

> 新大陸の銀はかくして中心商品の一つと考えられる。それによって旧世界の両端［ヨーロッパと中国］の間の貿易は行われ、世界の二つの離れた地域はこうした太いパイプでお互いにしっかりと繋がり合っていたのである。 (Smith, 1776, p. 207)

地球上のどこかに活力の中心があるとするなら、グローバリゼーションが誕生した時代には中国が 100 年に亘りまずその地位を占めたと言って良いだろう。16 世紀、世界人口に中国が占めた割合は今日以上に大きい (ざっと見積もって、今日世界人口の 20% を占めるのに対して、当時は 25% 以上である) 。西欧最大の都市が各々 20 万ほどであった 1600 年までに、中国は 100 万かもっと多くを擁する都市を複数有していた。巨大な都市、広大な稲の耕作地を持ち、世界の中で最も高い生活水準に達していた。この時代、中国経済がほかのどの国よりも秀でており、ヨーロッパ経済など比較にならない。

20 世紀の石油ビジネスを語る上で、その最大消費者の動向に特別な注意を払わないものはいない。だが、貿易史は中国が何世紀にも亘って世界で突出した銀最終市場であった事実に目を向けない。20 世紀の歴史家や社会科学者が真にグローバルな視点から貿易関係を捉えられないため、世界中の商人達がアジア市場に手を伸ばそうと必死になったことを理解できないでいる。15 世紀以来のイスラム商人のネットワークの強化と 16 世紀ヨーロッパ人のアジア海域への到着は特に世界史に永続的な影響を及ぼした。[13]

> 東アジアは 1000 年以上に亘って西洋と接触を保ってきた。その大部分は移住者と陸ルートの交易を通してであるが、時として直行ではないものの海を通して交易してきた。16・17 世紀に行われた交流ははるかに密接で、この地域の人々がそれまで経験した交流とは質が異なるほどだ。[14]

産業革命以前、アジアにヨーロッパ人のいたことが島嶼部や大陸の沿岸地域で確認されている点を理解するのは重要である。大陸部の諸国との対決など問題外である。マニラはスペインのアジアでの活動拠点であった。他方ポルトガルはゴア (インド) とマカオに陣取った。オランダとイギリスは 17 世紀初頭に到着し、オランダはバタビア (現ジャカルタ) に中心を定め、イギリスはインドの海岸線沿いにボンベイ、マドラス、カルカッタに交易の足場を得た。

---

(13) 15 世紀初期の明中国艦隊の有名な司令官鄭和は、彼自身はイスラムである。

(14) Warren I. Cohen, *East Asia at the Center: Four Thousand Years of Engagement with the World*, New York: Columbia University Press, 2000, p. 215.

ヨーロッパ人が日本やアジア大陸部の国々に脅威を与えることなどまだ不可能だった。例えば、1630 年代に日本はポルトガルを追放したが、その代わりにオランダ商人を用いた。オランダ人は長崎湾にある出島と呼ばれる小さな人工島に閉じこめられ、将軍は交易を厳しく管理した。それにしても、ヨーロッパ人はなぜこれほど熱心にアジアの周辺部分へ至ろうとしたのか。世界で最も利益の出る市場への参入を望んだというのがその解答である。アジアの香料、絹、陶磁器、それに 18 世紀には茶、これらは全て世界中でもて囃された商品だが、アジアと競争可能な生産者はいなかった。しかし、そうした商品に対してヨーロッパ人が提供できるものは何か？　その答えは唯一、銀のみである。

既に言及したように、銀は最終市場である中国に奔流の如く流れ込んでいった。その理由は単純で、中国の銀価格は世界の他地域の価格の二倍であったからだ。中国では少なくとも 11 世紀以来紙幣が存在した。しかし、財政問題が紙幣乱発を惹起し、15 世紀中葉には明の紙幣制度は破綻に追い込まれて、商人、特に中国沿岸部の商人は決済手段として銀を使うようになっていた。[15] 銀を決済手段とする傾向がますます強まり、地方政府は銀での納税を要求するようになっていく。明朝は、この下からわき起こってきた銀決済化の動きに長く反対していたが、抵抗しがたい動きに屈して、1570 年代の一条鞭法の形で現実に制度化した。種々の税金は帝国全土に統一された税として、銀でのみ支払う税制 (農民でさえ) が確立された。中国が少なくとも世界人口の四分の一を抱え、巨大都市 (例えば、南京は 100 万、北京は 66 万) を持っているので、中国の支払い手段と財政制度が銀ベースに変換すると非常に大きな影響が出る。更に、中国では朝貢制が広まっていたので、国内の銀決済の効果は中国の国境を遙かに越えて波及した。

> 中国を中心とした朝貢システムと地域間交易圏は全体としてそれ自体の構造を持ち、それは銀の流通を通じて、また、朝貢貿易によって中央につながる体系だった制御を行っていた。このシステムは東および東南アジアを巻き込み、さらにインドやイスラム地域、そしてヨーロッパへと、次々へと交易ゾーンを繋げていった。[16]

中国経済は極めて巨大であるので、この国が銀を決済手段にしたことで、中国における銀の市場価格がアメリカや日本、それにヨーロッパ等々、他のどこよりも遙かに高く上昇する原因となった。地域によって金銀比率が異なるので、中国では銀価格が高いことがすぐに明らかとなる。16 世紀初め頃、中国における金銀の交換比率は 1：6 であった。その頃「ヨーロッパでは 1：12、ペルシアでは 1：10、インドでは 1：8 程度で動いていた。[17]」銀が中国に何世紀にも亘って特に流入したのは当然である。なんということはない、中国人は銀に最高値をつけたからだ。貨幣ではないモノの交易での不均衡の埋め合わせとして銀が中国へ流れ込む様を描きだすより

(15)　中国の貨幣に関する長い歴史を知るには、記念碑的論文として以下を参照するとよい。 Richard von Glahn, *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China, 1000-1700*, Berkeley: University of California Press, 1966.

(16)　Takeshi Hamashita, "The Tribute System of Modern Asia", in A.J.H. Latham and H. Kawakatsu, *Japanese Industrialization and the Asian Economy*, London: Routledge, 1994, p. 97.

(17)　Richard von Glahn, 1996, p. 127.

も、銀市場そのものの中での価格差が地球規模での交易の能動的な原因であると認識する方がよい。世界を巡る交易網を通って中国に入った何千トンもの銀は広大な中国市場にさえたっぷりといき亘ったのである。中国における銀価格は 1640 年までに世界標準価格まで落ち込んだため、ポトシ - 日本銀ブームとその世界規模の特異な利潤構造は終わりを告げた。

半世紀の後、メキシコ銀ブームが 1540 年代 -1640 年代期と同様の経過をたどった。しかし、今度は衝撃的な環境変化を伴っていた。[18] 即ち、中国の人口が 18 世紀に劇的に増加したのである。それは中国の耕作面積がほぼ 5 割増加した時期に当たる。ある優れた中国学者は、18 世紀中国の人口増加は大規模な生態学上の変化によって多分に加速された、という。即ち新大陸からの新作物 (特にラテンアメリカ原産の甘藷、落花生、玉蜀黍) の導入である。[19] これらの人口増加は中国内の商業活動の増大と更なる生態学上の変化と関連する。[20] 簡潔に言えば、中国の 18 世紀の人口爆発と市場の成長は中国の銀需要を再び大きく増大させた。その結果としての需要圧力が中国内の銀価格 (金銀比率の開きが再びこのことを明らかにする) を世界の他の地域に比して 50% ほど急騰させる原因となった。メキシコの銀採鉱に起きた供給の変化は、中国の大規模な人口変動と相まって 18 世紀前半期に二回目の世界的な銀ブームの火付け役となった。18 世紀スペイン領アメリカの銀 (ほとんどがメキシコ産である) は 16・17 世紀より生産量が多い。メキシコで鋳造された高品質のペソ貨は史上もっともよく流通した貨幣になった。世界を巡る交易の流れは中国市場向けの銀で溢れかえった。1750 年までに中国の銀価格は世界の他の地域の価格まで (1640 年のように) 再び下落した。巨額の利益は消え失せ、地球規模での交易危機が再び現れた。

今素描した概略は、18 世紀中葉のアジアで外国交易に劇的な変化があったことを明らかにする。1757 年のプラッシーの戦いはイギリスのベンガル支配を導いたし、「1750 年代、1760 年代、1770 年代の 30 年間に中国貿易から上げた利益により、イギリスは東洋における地位を堅固にした。イギリスが上り坂にあるこの 30 年間にフランスとオランダは没落の道を辿った。[21]」

イギリス勢は急成長を遂げる新たな市場をうまく支配下に置いた。その市場は中国からの茶輸出取引に、ある程度ではあるがベンガル・アヘンの中国による輸入を組み合わせている。こ

---

(18) 以下を参照されよ。D.O. Flynn and A. Giráldez, "Cycles of Silver: Global Economic Unity through the Mid-18th Century", *Journal of World History*, 13. 2 (Fall 2002).

(19) Jonathan D. Spence, *The Search for Modern China*, New York: W.W. Norton, 1990, p. 95. クロスビーに拠れば、「旧世界の規模の小さい人間集団は中国人より素早くアメリカ原産の可食植物に適応したはずである。コルテスと共にテノチティトゥランを攻撃した人々がまだ生きていた頃、上海近くの砂地ではピーナッツが膨らみ、華南では玉蜀黍が大地を緑に色づかせ、甘藷が福建の貧しい人々の主要産物となりつつあった。」 Alfred W. Crosby, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*, Westport, CT.: Greenwood Press, 1972, p. 199. 我々が銀の世界市場を強調すると、中国が果たした中心的役割に注目することになる。しかしアメリカ産植物が世界中に与えた影響を無視することは出来ない。例えばクロスビーは次のようにもいう (*Ibid*., p. 185)。即ち「アフリカにおけるアメリカ原産農産物の重要性は旧世界のいかなる大陸よりも明らかである。 というのはアメリカ自身を除く他の大陸では , アフリカにおけるほど多くの人口がアメリカ原産農産物に依存していない」と。

(20) 以下を参照されよ。Robert B. Marks, *Tigers, Rice, Silk and Silt: Environment and Economy in Late Imperial South China*, New York and London: Cambridge University Press, 1998.

(21) Holden Furber, *Rival Empires of Trade in the Orient 1600-1800*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1976, p. 176.

こでの問題点は、18 世紀後半に銀の中国流入が止んだという点――そういう事実はない――ではなく、アヘンと茶が利益率の大きな市場になり、銀は利益率の点で副次的なものになったということだ。ロンドンの茶輸入は 1760 年までに 250 万ポンド、1769-70 年では 900 万ポンド、1785-86 年では 1400 万ポンド、この世紀の終わりまでには 2300 万ポンドに達しており[22]、そして［中国への］アヘン搬入量は 1729 年から 1800 年の間に 20 倍以上に拡大している。それはイギリスから中国に流出する銀延べ棒量減少を助けた[23]。ただ、中国のアヘン消費の歴史自体は 16 世紀にフィリッピン経由で入ったアメリカ煙草と関連するものだ。「中国におけるアヘン吸飲の習慣は煙草喫煙の一形態であり、それから始まったものだ[24]。」ここでも重大な生物学上の往来にアメリカ原産品が絡む。この時煙草はアヘン吸飲と関連、18 世紀後半においてアヘンはアメリカ銀よりも、イギリスにとっては儲けが多い中国向け輸出品だった。イギリスのアヘン専売は莫大な儲けが出るもので、東インド会社がカルカッタ渡しでオランダ人に売るときでさえ、少なくとも 100% の純益があった[25]。イギリスの茶とアヘンの交換自体は地球規模で繋がる交易連鎖の一部を構成するに過ぎない。イギリス人はこの時期、お茶に入れて砂糖を消費していたが、これはアメリカの奴隷労働によって生産された砂糖の大量輸入を求めた。

ヨーロッパとアメリカ合衆国は産業革命後、軍事的、経済的に優位に立ったのは明らかだが、このことは 19 世紀が進むにつれて陸路に頼るアジア諸国を支配することも含まれていた。しかしながら、ヨーロッパやアメリカ (後には日本) の経済的支配は産業革命後の現象である。

> ちょうど 200 年前、二つの国 (中国とインド) は世界の生産量の三分の二を占めていた。中国やインドのような農業部門で大きく発達した帝国よりも、むしろ工業国、国民国家と呼ばれるヨーロッパ式の国々が世界を支配するようになったのはいかにしてであろうか[26]。

アジアの優れた経済力をいい立てる近頃流行の言辞をまたやっているのかと読者に思われても困るので、同時代に生きていた人の言葉を引用する。即ち 18 世紀の秀でた学者、デビッド・ヒュームはいう。「中国人は日当 1.5 ペンスであるが、非常に熟練している。もし、中国がフランスやスペインほど近いところにあるなら、我々の用に当てるものは悉く中国製となるだろう…[27]。」またアダム・スミスは自明の事として以下を断言する。「中国はヨーロッパのどこよりも遙かに豊かな国である。そして中国とヨーロッパにおける食料価格の違いは非常に大きい。

---

(22) *Ibid*., p. 175.

(23) K. Pomeranz and S. Topik, *The World that Trade Created: Society, Culture, and the World Economy, 1400 to the Present*, Armonk, N.Y. and London: M.E. Sharpe, 1999, p. 103.

(24) Jonathan D. Spence, *Chinese Roundabout: Essays in History and Culture*, New York and London: W.W. Norton, 1992, p. 231.

(25) Carl A. Troki, *Opium, empire and the global political economy: a study of the Asian opium trade, 1750-1950, Asia's transformations*, London: New York: Routledge, 1999, p. 54.

(26) Robert B. Marks, *The Origins of the Modern World: A Global and Ecological Narrative*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2002, p. 2.

(27) "Hume to Oswald, 1 November 1750", in Eugene Rotwein (ed.), *David Hume Writings on Economics*, Madison: University of Wisconsin Press, 1970, p. 198.

中国の米はヨーロッパのどこで生産された小麦よりも安い。[28]」

ケネス・ポメランツの受賞作 *The Great Divergence*（『大分岐点』）はヨーロッパと中国の生活水準を系統的に比較している。[29] ヨーロッパの最も発展した地域は産業革命の時期までに中国の発展した地域と大体同じ生活水準に達したと同著で結論づけている。

> 結論として、1750 年頃中国や日本の中心地域は、西ヨーロッパの最も進んだ地域と似通う状態にあったと思われる。両者共、進歩した農業、商業、軽工業を似たような方法で統合していた。議論の余地はあるが、市場経済を新古典派の理想に西ヨーロッパよりももっと近い形で 18 世紀の中国 (多分、日本も) は実現していた。(70 頁)

ポメランツはユーラシア大陸における全ての発展した地域は、産業革命に先立つ時期、自然および人間の手になる資源の枯渇という点で重大な危機に直面していたと主張する。そのような地域では既存の生活水準をずっと維持し得るとはいえなかったし、まして新しい工業化の時代に到達するなど思いもよらないだろう。ポメランツに拠れば、いくつかのヨーロッパの国 (特にイギリス) が重要な利点を享受したが、その一つはアメリカの広大な自然資源を手に入れたということだ。彼の著作では、このヨーロッパの優位性を示す量的な推計が数多く提示されている。アジアの国々はそうした同様の自然資源を得ることは出来なかった。ポメランツの仮説が現在および将来に提起される懐疑に耐えうるものか否かはこれから明らかになるであろう。しかしながら、彼の優れた研究と大胆なスタンスにより、産業革命に関する今後の議論が必然的にグローバルな視点に基づくものになることは疑いを容れない。今後、反論の仮説はすべて、地球規模での分析を行わなければならない。

４．結論

「グローバリゼーション」という言葉の明確な定義づけにコンセンサスがないことが、議論に学問的な厳密さを欠く原因となっている。そこで我々は、グローバリゼーションが検証可能で系統的に研究できる性質をもった歴史の一過程であると主張してきた。イントロダクションで述べたように、地球規模での交易は 1．全ての人口稠密な大陸が継続的に――他の大陸と直接的、間接的、そして相互に――産品を交換し始めた時、2．全ての交易相手に継続的な影響を与えるのに十分な量の交易が行われた時に始まるのである。グローバリゼーションの誕生は 1571 年であり、それはアジアとアメリカを繋ぐスペインの拠点としてマニラが建設された年だ。アメリカ大陸の 1 万年以上に及ぶ孤立を経て、「コロンブスの航海」（大西洋）、「マゼラ

(28) Adam Smith, *An Inquiry Into the Nature and Causes of The Wealth of Nations*, New York: Random House, 1965 [1776], p. 189.

(29) Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of Modern World Economy*, Princeton: Princeton University Press, 2000.

ンの航海[30]」（太平洋）が人の住む全ての大陸を、交易、疾病、自然環境、文化において永続的に結びつけたのである。16 世紀から 18 世紀にかけて、銀は世界を繋ぐ最も重要な商品であり、中国は最強の支配力をもった最終市場であった。産業革命といわゆる西欧の優位性もグローバルなコンテクストで語り直す必要がある。

今日の「グローバリゼーションの時代」は、歴史家でない人たちが一般書や学術書でいうように第二次世界大戦後に始まったものではない。また、グローバリゼーションは 1820 年代の価格平準化によって始まったのでも、歴史学的訓練を受けた研究者のある人々が主張するように、18 世紀までにヨーロッパが地球規模で物事を意識し始めていたことで始まったのでもない。そして、世界史研究者の中には何千年にも亘ってアフロ＝ユーラシア大陸を長距離で往来してきたことを主張する人もいるが、これも正確には地球規模と呼ぶことは出来ない。アフロ＝ユーラシア大陸の「旧世界」は地球表面積の僅か三分の一を占めるに過ぎないからだ。地球表面積の三分の二が蚊帳の外にあるのに、それを「地球規模」と銘打つのはどう考えても無理がある。コロンブスの航海は、アメリカ大陸――大西洋を含めると地球表面積の三分の一に及ぶ――を 15 世紀末以来旧世界の動きに結びつけることになった。しかし、まだ地球規模とは言えない。1571 年に始まった新世界とアジアの永続的繋がり――銀が取り持つアカプルコ＝マニラガレオンルートだが――が、やっと地球の残りの三分の一を導き入れて地球規模として繋がったのだ[31]。新世界と旧世界の繋がりは今日世界の形成に深く影響した。アメリカ大陸を世界の他の部分に繋げたことは、深遠な生態学的かつ社会的変革をもたらした。これについては、アルフレッド・クロスビーが、15 世紀以降の植物相、動物相、それに疫病面での地球規模の交流は洪積世の終焉に起きた死滅以来、この地球で見られたいかなる現象よりも根底からの変革であると子細に描きだしたものだ[32]。グローバルシステムのリズムを変動させる突発的な状況や変化がいくつかの特定の時期に起きたことを我々は認識している。例えば、18 世紀にはアジア輸出品に新種（例えば茶、アヘン）がそれ以前の時代からの伝統的な輸出品（例えば、絹、陶磁器、それに香料など）に加わった。技術革新が生産や交易の速度を上げ続けたが、しかし今日我々が持つグローバルシステムは 16 世紀初頭以来展開し続けている歴史的な動きの結果なのである。

我々は銀交易が上述したような強力な役割を果たしたと主張してきたので、グローバリゼーション誕生に関して経済的な局面を強調しすぎていると批判する人もいるかもしれない。しかし、世界レベルでの銀交易に関するここ数十年の研究は新たな洞察を可能にした。つまり地球規模での何世紀にも及ぶ動きを分析しようとする時は、学問分野を超えた多様な側面から分析することが不可欠になる。対象期間が長い地球規模の歴史研究は伝統的な専門領域の垣根を取

(30) John R. McNeill (ed.), *Environmental History in the Pacific World*, Aldershot: Ashgate, 2001, pp. xix-xx を参照されよ。

(31) おそらく、氷河期の終わり（大洋がせり上がり、新世界が旧世界から孤立した時）に先立って、人類は人口を大いに増やしたので、世界が再び「繋がりあった時」は最初に遭遇した時よりもっと根底からの変革を経験している。そうだとしても、今日のグローバリゼーションは、1571 年以降の世界の一元化の強さと質の点で、他の経験とは隔絶するものだ。

(32) Alfred W. Crosby, *Ecological Imperialism: The Biological Expansion of Europe, 900-1900*, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1986, p. 271.

り払わなければ成りがたい。

> 人間の歴史の中で特徴的な現象を理解するためには、生物学者、あるいは地質学者が問題にアプローチする手法から学ぶべきものがある。我々は生物学者や地質学者にはなれないし、こうした分野に関する我々の理解には限界があるだろう。しかし、他分野の専門家達が持つ高度な専門知識を、手法面で我々の分野にできるだけ活用すべきである。彼らが「過去」に関して持つ我々とは異なる展望から我々が学ぶべきものは多い。専門領域の違いをあまり気にしすぎると、異種分野間の知的相乗効果を得る可能性を見逃す危険性がある。[33]

グローバリゼーションが始まって以来、あくなき利潤の追求が、意図せずして伝染病の伝播を惹起し、また知らぬうちに地球規模で植物相や動物相が広がることとなった。生態、人口、そして文化面で引き起こされた多岐に亘る反応は文字通り世界の姿を作り変えた。物質面、文化面での変化は、経済的局面に再び跳ね返り、そしてそれがまたモノと文化面に影響を与えるというフィードバックが無限に続く。この意味で、グローバリゼーションは 16 世紀に始まったということを理解して初めて、その力が正しく認識されるのである。

(33) David Christian, *Maps of Time: An Introduction to Big History*, Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press, 2004, p. 9.　我々が高々 2-3 世紀のタイムスパンで見ているのに比して、デビッド・クリスティアンの時間設定は宇宙の誕生にまで遡り、1300 万年に及ぶ。だが、重要な点は長いスパンで分析を試みるなら、異分野間の協力が必要になるということだ。